

ハイデガーにおける「無」

浅野 章

日本大学大学院総合社会情報研究科

Heidegger's Notion of 'Nothingness'

ASANO Akira

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Martin Heidegger (1889-1976) gave his inaugural lecture as professor of Freiburg University on July 24, 1929. This address, delivered under the title of 'What is Metaphysics?', was mainly concerned with the notion of 'nothingness', which was later to become one of the key concepts of his philosophy. How does this notion relate to the main topics of his philosophical arguments? In this essay the author examines the notion in connection with his critique of technology, referring specifically to his 'letter' to a Japanese student of philosophy.

1. はじめに

1929年7月24日、フライブルク大学大講堂において、M・ハイデガー（1889－1976）は、自らの教授就任の講演に臨んだ。演題は「形而上学とはなにか」。主題とするところは「無」であった。ハイデガーはニヒリストではない。以下、ハイデガーの説く「無」と彼の鋭利な現代技術文明批判との関わりについて、若干の考察を試みてみたい。

無が哲学の主題になることは稀である。

現代の欧米において、無の哲学といえば、ハイデガーにおいては先ず考えられないであろう。そのハイデガーにしても、無の思想にこだわり続けているわけではない。しかし、哲学に関心をもつものにとって、無についての思索は、魅力あるものである。それは、哲学が徹底した学であろうとする限り、当然のことかもしれない。ここに人間本性としての形而上学への止みがたい関心が認められる。カントの指摘する形而上学的存在としての人間の本質をおもわせる。

形而上学と無のかかわりについて、ハイデガーのユニークな見解を探ってみようと思う。

論考は先ず、ハイデガーが日本の研究者の一人の書簡による質問についてのハイデガーの返書を取り上げ、これを紹介するとともに、内容を理解する上

で重要な概念である無に注目し、さらに、ハイデガーの無の思索の宝庫といっても過言ではない『形而上学とは何か』に言及し、ハイデガーにおける無と現代技術との関わりについて考えてみることにしたい。

2. ハイデガーと無

2.1 書簡をてがかりとして

私は以前に「形而上学とは何か」（1929）のなかで、人間が存在の呼びかけに応じ、そうすることによって存在がその都度あらわになりうる確証の場を用意するような実相を一人間は「無の座席」とあるという言葉で述べておきました。すでに1930年に日本語に翻訳されたこの講演は、あなたのお国では直ちに理解されましたが、ヨーロッパではまるで違って、今日でもなおこの引用語は虚無主義的な誤解のまま流布されています。¹

これは、手紙といっても、もちろんハイデガーが進んで日本人に宛てたもの、つまり往信としての手紙ではないが、そのことを含めて、いろいろなことを考えさせるハイデガーの書簡の一部である。

いろいろなことを考えさせる、と記したが、その考えの資料として、なお追加しなければならないものもいくつかある。一つはこの手紙の掲載もとについてである。引用文献として注1に記してあるように、『読売新聞』に掲載されたものである。もとより学術専門の紙面ではなく、いわゆる商業新聞においてではあれ、というより、むしろその方が、この書簡の持つ意義について考えるには好都合である。

次にこの点についても注1において当然記してあるが、この手紙の取り交わされた時期である。新聞に掲載、といっても、過去の記録に関することではなく、取り上げられている記事は、まさに、新聞の語の示すように当代の先端に位置する事態でなければ、その意味を失う。1963年におけるこの書簡の持つ意義、それについては、なお、自余の部分を引用しなければならないが、それは折を見てのこととして、今は掲出の一節に目をとどめることとしたい。

断るまでもなく、ここでハイデガーが問題にしているのは「無」である。それも『形而上学とは何か』において問題にしている無である。

ここで、追加しなければならない資料として、さらに加えておく。ハイデガーが、1930年に日本語に翻訳されたと記している、その訳本についてである。

日本におけるハイデガーの著書の翻訳の先駆けとなる『形而上学とは何か』の訳者は湯浅誠之助である²。ハイデガーはこのことには触れていないので、これも当然追加資料ということになる。

以上の諸点を含め、掲出引用の箇所に戻って考えてみる。

無は目下拙論の主題であり、さし当たって他の諸点についてみることにする。

発表機関について、それが哲学あるいは思想の専門書ではなく一般大衆を対象として発行されている商業紙、日本最大の発行部数を誇る新聞といわぬまでも、ごく普通の新聞である、という点。このことと、哲学の専門家をしてさえ、難解と言わしめているハイデガーとの結びつき、そこに、興味をそそられるものがある。いってみれば、それほどまでにハイデガーは日本において定着し普及しているということであろう。このことはまた、いろいろと興味あ

る問いを生じさせるが、その一々に触れる暇はない。裏面から、いささかこの点に触れるならば、ハイデガーに関する著作はよく捌かれるということであろう。

次に取り上げる点がこのことを自ら示している。

この手紙の認められた時期、それは同時に新聞紙面に公表された時でもあるが、1963年である。1945年に第二次世界大戦が終結し、戦後思想として実存主義がマルクス主義とともに一世を風靡していた。この思想界における動向に、それから二十年を経ようとしていた。国の内外に激動の機運は絶えなかった。60年新安保条約締結、65年ヴェトナム戦争北爆開始。63年『沈黙の春』による環境汚染の告発。67年初の心臓移植。60年を前後しての宇宙開発技術の進展。この時期におけるハイデガーの思想的立場を端的に示しているのが掲出の書簡である。というより、その点についてのハイデガーの見解を問い合わせた手紙に対する返書なのである。

発信者すなわち質問者である小島威彦の書簡については確認できないが、当面その必要はないであろう。その内容をハイデガーは、三つにまとめて、それぞれについて答えている。この対応の仕方、姿勢にハイデガーの独自性を見る。

「私たちは思考の最も問うに値する問いに近づくことができるでしょう」と、断った上で以下の三点を挙げている。

- ①「世界のヨーロッパ化」とはなにを意味するのか。②あなたの「人間喪失」という意味はなにをさしているのか。③「人間たる本領に達する道」はどこにあるのか。³

①の「世界のヨーロッパ化」について、ハイデガーは「立つ場をとらせる力の下に、近代科学の技術的性格までが立たされている」という見方により解説している。この力は、ハイデガーの現代文明批判の鍵概念であり、いわゆる立て集めの思想としておなじみであるが、ハイデガーのこの書簡によってその間の事情を窺うことにしよう。

ハイデガーは、この力を次のように説いている。

この力は、存在しうるもの、存在しているものを問わずすべての存在を、算定することができ、しかも固定させることのできる物として見えてくるように——否、ただかくのごときものとしてのみ——受け取る以外には許さないのです。このような立場をとらせる力は、決して人間の作りものではありません。だから科学も工業も経済も同様に、この力の支配下に置かれるのです。つまりこの力によって実に千差万別の立て直しへとかりたてられてしまうのです。⁴

立場でなく、立つ場をとらせる力がこれで明らかになったとは言えないであろうが、重要な点には触れている。「人間の作り物ではない」ということと、「科学も工業も、経済も同様に、この力の支配下におかれ」「千差万別の立て直しへと駆り立てられてしまう」という。この力、ここにもハイデガー特有の発想が見られる。存在についてもそうであるが、ハイデガー自身は否定するにしても実体概念の拡張とでも言うべき論理でありまさに存在論あるいは形而上学である⁵。まことに恐るべきこの力なるものの正体は何であり、この怪物をいかに取り押さえ制御するか、刻下の急務というほかはない。

ハイデガーは、世界のヨーロッパ化という言い方を、ある程度正しいと認めながらも、この力の特異性を省察することを怠るなら、それは、「根源に到達しえない歴史的・地理的名称にとどまってしまう」と警告して、次のように問うことが必要であるとしている。

いったい私たちの思考とその伝承が、かかる力の訴え求めるところを聞き取り、そこにひそんでいる立つ場をとらせるというそのことを、そのものずばりと言い表すだけの資格をそなえているかどうかと。⁶

この問いに対するハイデガーの見方は消極的である。西欧的・ヨーロッパ的思考もはじめて、この立つ場をとらせる力に襲われたが、従来のような形ではその特性にかなって問いかけるには十分ではなくなった。それで、以下の二問についても、ほんの推

察の域をでるに過ぎないとしている。

もとより、この手紙の紹介が拙稿の目的ではない。しかし、最初に引用したように、きわめて密接にかかわる内容を持っている以上、ある程度深入りすることはむしろ必然の成り行きであろう。

そこで、第二の問いについて簡単に見ておきたい。

②は「人間喪失」についての問いである。

この問題については、『存在と時間』が、いわば哲学のみではなく二十世紀を支配した実存哲学あるいは実存の思想の嚆矢としての位置を占めている。『存在と時間』の発想に似た印象を与える。しかし『存在と時間』は哲学の正統に属する存在論であって、当世流行の一時的な際物ではない、と言う抗議もなされている。事実『存在と時間』を紐解けば、この間の事情は、特に開巻数ページにして立ちどころに了解される。とはいえ、内容の訴えてくる迫力の点から言うと、まさにこの書が評判をとったその時代背景との相乗効果を勘案するならば、世評の根拠をそこに見出すことはそれほど困難ではない。個性を失った現存在としての人間が世人（das Man）のなかに頹落し、非本来的な存在からその本質である実存に覚醒し、死への存在へと責めある声に覚悟性を持って臨み本来の自己としての存在を明らかにしてゆく論考は、まさに実存の思想の展開である。

『存在と時間』の出版は1927年である。その間に36年を経過している。その上、この間に人類は史上経験したことのない激動を経験している。ハイデガーの一身上においてもその生涯において最大の問題を当時のみではなく今日に至るまで影響する一大事件を経験している。

したがって、1963年当時のハイデガーの見解、ほかならぬ「人間喪失」について、聞くことの意義は決して小さなものではない。またこの問いを、改めて問い直す背景、すなわち社会的状況が、60年から70年代に及ぶ激動の一時期であることを思えば一層その感が深い。

人間がそこに立たされているその立つ場をとらせる力によって、人間本来の独自性が人間に拒否されていること、そこにこそ最も人間の人間性を脅かす危険きわまりないものが横たわって

いるのです。⁷

人間喪失についてはこのように、立つ場をとらせる力なるものの威力のなせる技であると指摘する。それをハイデガーは、「挑発されている」とも記している。すなわち、人間は立つ場をとる力にさらされているが、これを氣にとめず、自分の属している世界をあまねく算定しうる物として配置し、しかも同時に自分自身で配置ができるものだときめてかかっているような場に立たされている、というのである。ハイデガーのこの点についての見方は厳しく警世的である。「人間は、算定しうるものやその可能性を配置しようとする意志に呪縛されて」しまい、「人間は、立つ場をとる力に売り渡されてしまって、自分の生存の本領にいたる道をふさがれている」⁸とさえ断言している。

このようなハイデガーのペシミステックな見方に対して、一般世人はどうかというと、「しのびよるようにやってくる生存の退屈さ」、これは「すなおに退屈だと認められ」ることもなく、「報道活動や娯楽産業や観光事業によって全く覆い隠されていて、払いのけようとしてもどうにもならない」もののなかにおかれている。まさに、実存哲学、『存在と時間』の基底を貫く一つの太い線の延長を思わせる。同時に、立て集めの思想もまたこの観点から特にハイデガーにあっては新規なものではなく、ハイデガー思想の展開の一形態であることを知らされる。

立つ場をとらせる力による人間喪失、これを踏まえて、第三の人間本領の問いについて問われる。

③「人間たる本領に達する道」はどこにあるのか。この道を示すにあたって、冒頭に記した『形而上学とは何か』が顧みられる。この点については後に触れることとして、差し当たって、この道、人間本領に達する道、があるのかなのか、まずそこから見ることにしよう。この点については、『形而上学とは何か』あるいは「ヒューマニズムについて」において述べている考え方（「存在の牧人」）ではなお不十分として、

「立つ場をとらせる」働き、つまり世界を技術化するということの本来の意味を注視するこ

とこそ、人間の本領へいたる道を教えてくれます。⁹

きわめて簡単な叙述のうちに人間本領に達する道のあることを示している。しかし、世界を技術化することの本来の意味、となると、簡単に受け取ることとはできない。ハイデガーが説いて止まない世界の技術化、これについては、まさに仰せのとおり、というより、そのこと自体もはや今日何人もそれを疑うことはもとより、あえて考えるどころか、思いもしない余りに明々白々たる事実となっている。

まさに技術化された世界のなかに生まれ、技術化の恐るべき進行のせかいのなかに生きている。もとより地球規模のもとに世界を見渡すならば、必ずしも適切とはいえないであろうが、少なくとも先進諸国はもとより発展途上国においても、見る限り、世界の技術化はきわめて平凡な、取り立てて騒ぎ立てることのないありきたりの事柄に過ぎない。現に、先進諸国とか発展途上国などと記したが、そもそも何を基準にして、先進あるいは発展というのか。工業。これなくして先進もなければ発展もない。情報産業も交通機関も工業が生み出す。それどころか、日々の生活についてみるならば、まさに文字通りライフラインの円滑な作動なしにはたちどころに、命にかかわる自体が突発することはいわゆる自然災害により痛切に経験させられている。地球温暖化現象の元凶についてはあえて言うまでもない。工業の基礎は科学技術にあり、物理学数学あるいは論理学がその基をなしている。計量に関する諸科学である。

ここでハイデガーの説く、世界を技術化する本来の意味、について、それが容易ならぬ問題をはらんでいることを察知させられるであろう。しかし、この点について人々は立ち止まって考えようとしていようには見えない。日々の生活の安易さに慣れ、さらにより快適な生活を追い求めて止まない。そうであるからこそ、世界の技術化の意味について、ハイデガーは哲学者であり、その意味の本来性を問う。単に世界の技術化の意味というのであれば、さまざまな立場から問い、問題にすることが可能であるが、本来の意味となると、それらの意味を超えて問いを発していることとなる。つまりメタ的であり超越

的である。本来性は、ハイデガー好みの語であることは断るまでもあるまい。

世界の技術化の本来的な意味を問う、すなわち、世界の技術化の本来的な意味に注視することを、ハイデガーが促したのは、人間の本領に至る道が、そこに教示されているという、ハイデガーの指摘によるものであった。その際、『形而上学とは何か』を取り上げ、「無の座席」に言及している。

「無の座席」とは、『形而上学とは何か』のなかで、人間が存在の呼びかけに応じ、応じることによって存在がその都度あらわになりうる確証の場を用意するような実相を表す言葉である、と、ハイデガーは、この書簡において述べている。さらに、無について、次のように説明している。

ここでいっている「無」とは、存在するものという点からいえば決して在るものとはいえないもの、したがって無で「ある」ものを意味しています。¹⁰

この簡潔な無についての説明、これが、『形而上学とは何か』の本文における主題である。この点について、いささか拘っておきたい。そのことが、人間の本領へ達する道を理解する上で参考になるであろう。

まずハイデガーの膨大な著作集の中に無を題名とした作品はないが、ハイデガーと無は深くかかわっている。

2.2 無についての講義 書式

無を主題としてなされた講義の題目は「形而上学とは何か」であり、公刊されている(1929)。この後、後語が記され(1943)、さらに序文が添えられて(1949)、『形而上学とは何か』の体裁内容ともに完備した形をとるに至っている。

ハイデガーの無に寄せる関心の深さは、これを主題として行われた講義の背景を知ることによって明確に知ることが出来る。すでに本紀要において取りあげたこともあるのでいまさらの感がしないでもないが、事柄の性質上今一度略記しておく。

この講義は、ハイデガーがマールブルク大学から、

再びフライブルク大学へ、ハイデガーの師であるフッサールの後任の教授として就任した際、その就任の記念講義として、フライブルク大学の大講堂において1929年7月24日に行われた。したがって、学生はもとより、フライブルク大学全学の教育者・研究者を眼前にした講義というより講演であった。

まずこの点を踏まえておくことが、講義を理解するに当たって要請される。つまり、ハイデガーの本講義に対する姿勢を先ず読み取っておくことである。

講義をする相手は、学生ではなく、また、哲学あるいはそれに関連する研究集団ではなく、そうかといって、一般市民を対象とする講演でもない。

眼前に居並んでいるのは、フライブルク大学全学の教育に携わり研究に従事している、学問(科学)の世界すなわち学界における研究者であり、教育者であり、学生である。

これらの人たちを前にして、口述しようとしているテーマが「形而上学」である。

この題目の選定の中に、哲学者ハイデガーの面目をみる。形而上学、まさに哲学のうちの哲学である。哲学のみならず万学の王と称せられるアリストテレス Aristoteles (384－322B.C.) において、第一哲学 *prôtē philosophia* と呼ばれた系譜に属する「形而上学」、これ以上の哲学における題目はないであろう。

形而上学は哲学の中の哲学である。哲学、一般に学問と言う名称に対する印象になお輪をかけた印象を哲学という呼び名は与える。その中のさらに哲学というのであるから、到底一般の人たちには近づきたい印象を与えるのみではなく、学問研究を専らにする人たちにとっても、形而上学はある種の感覚を持って受け取られている。もとより受け取り方は様々であるにしても、肯定的にみるものから否定的に見るものまで、その範囲は極端である。この点については哲学の分野にしてさえも事情は変わらない。しかし、近代以降、つまり実証主義が学問の主流を成すようになるとともに、形而上学は文字通り背後世界へと退いていった。

この形而上学を、特に実証的経験と数理を拠り所として日々の研鑽に勤めている大方の学問研究者を対象に、講ずることは決して容易なことではない。もとより、そこはお互い専門化した今日の学界のこ

とであり、ある種の寛容を持って、この記念の日のいわば慣例のフライブルク大学の行事として受け取ろうとする、おそらくはそれが出席者の見方の大勢であったと想像される。

その上、哲学のうちの哲学、形而上学においてその内容として、「無」について語ろうと言うのである。

もはや、講義の開始以前に、聴衆の反応は見え透いているようにも思われる。

以上の諸点を勘案するならば、「形而上学とは何か」、この表題の意味する所がなみなみならないものであることが推測されるであろう。

2.3 「無の座席」

「無の座席」の出所は、『形而上学とは何か』の本文中にあると、ハイデガーは記している。あえてこれに言及するのは、本文を単に読んでいては気づかず、この語の文字通りの使用は見当たらない。つまり、訳者は「無の座席」という印象深い言葉は用いておらず、少なくとも「無の座席」という関心を持って本文に対していたとは思われない。つまり、ハイデガーの指摘を待って始めて関心を新たにさせられる性格に属する語と言えそうである。とはいえ、文字通り「無の座席」ではないが、関連する思想はある。ある、と言うより、これこそ本文中最も重要な位置を占めて論述されている。今一度、書簡に記された一文を掲載してみよう。

私は以前に「形而上学とは何か」(1929)のなかで、人間が存在の呼びかけに応じ、そうすることによって存在がその都度あらわになりうる確証の場を用意するような実相を一人間は「無の座席」であるという言葉で述べておきました。すでに 1930 年に日本語に翻訳されたこの講演は、あなたのお国では直ちに理解されましたが、ヨーロッパではまるで違って、今日でもなおこの引用語は虚無主義的な誤解のまま流布されています。¹¹

これに引き続いて、「無」について説かれているのは記述のとおりであるが、便宜上再掲しておく。

ここでいっている「無」とは、存在するものという点からいえば決して在るものとはいえないもの、したがって無で「ある」ものを意味しています。しかしそれにもかかわらず、それは存在するものをかくのごときものとして規定するところのもの、したがって「存在」と名づけられるものをさしています。人間とは「無の座席」であり、また人間とは「存在の牧人（主人ではなく）」である（「ヒューマニズムについて」1947年）と述べたのは、同じことをいっているのです。¹²

書簡の趣旨からいうと、「無の座席」あるいは「存在の牧人」という表現では、なお不十分であると、ハイデガーは述懐しているが、当面の論考においては上掲の一文で足りる。

問題は「無の座席」にある。

眼前に並み居る聴講者、それは研究者であり教育者であり学生である。それも哲学部のみに限らず文科系はもとより理数系を含めた総合大学フライブルク大学の全領域に及ぶ聴講者に対して語る講演「形而上学とは何か」の主題が「無」である。この主題をいかに説得的に語るか、しかも単にいわゆる講義風にその歴史的由来や学説の紹介ではなく、ハイデガー独自の学の研鑽の実を示しつつ口述することは、決して容易なことではない。講演の冒頭に、特に聴衆に訴えたのは、このような配慮あつての故であろう。もっともハイデガー一流の説き方が、共に考えるということにある、のを思えば、取り立てて述べるまでもないのであるが、就任講演の場合は、また事情が特殊である。

さて、聴衆の関心を無へと誘うのに、大学の現行の構造・組織から説き起こし、学問研究の在り様に説き及び、一般にいかなる学も研究も「無」には全く関心を持たない点を摘抉した後、無が考究の対象になるか否かを問い、不安によって可能であると説く。

不安によって、在るもののすべては、迂り去ってゆき、無があらわになる。無の働きは無の無化にある。ハイデガーにおいては、無は単に消極的な無あるいは非、否の域にとどまるものではない。消極的

な無の根底には積極的な無の作用がある。あるものが否認され否定されるのは、無の働きによる。無が根底にある。存在を存在せしめるものは無である。無の無化。存在の謎であり神秘である。ここにおいて無はまた存在ということになる¹³。

掲出の一文の意味はこの点に触れるものである。

ハイデガーは周知のように存在と存在するものとを峻別する。無はいくまでもなく存在するものにとっては他なるものである。その意味からいっても存在と無との関わりが存在するものとは性格の異なるものであることは理解されよう。もとよりハイデガーの説く存在は容易に理解されがたいものをもって¹⁴。

人間存在、Dasein, Da-sein (現存在)、これを術語として採用し、その構造分析を、現象学・解釈学の手法によって存在論として論考したのが『存在と時間』である。ハイデガーの哲学観はここに端的に示されている。

Philosophie ist universale phänomenologische Ontologie, ausgehend von der Hermeneutik des Daseins, die als Analytik der Existenz das Ende des Leitfadens alles philosophischen Fragens dort festgemacht hat, woraus es entspringt und wohin es zurückschlägt.¹⁵

人間のみがあらゆる存在するもののうちで、存在を了解している唯一の存在するものである。この見地から Dasein の名称が選ばれた。ここに「無の座席」は、これと発想の仕方を同じにしているのを読み取るには困難はない。ハイデガーの説明に立ち返ってみるならば、「人間が存在の呼びかけに応じ、そうすることによって存在がその都度あらわになりうる確証の場を用意するような実相を一人間は「無の座席」であるという言葉で述べておきました」¹⁶と記している。この点についてこれ以上こだわる必要はないであろう。

問題は『形而上学とは何か』にある。

「現存在とは無の中に保たれてあること (Hineingehaltenheit in das Nichts) である」¹⁷と、人

間と無との関わりについて、一つの決め手になる状態を記しているが、まさに「無」なる概念について、眼前の学術関係者に訴える最高の場面に達しようとしている際に述べられた言葉でもある。

次の一文がこれを証する。

現存在は無の中にたもたれつつ常に事前に全体としての存在事物を超え出ている。この存在事物から超え出てあることを、我々は超越 (Transzendenz) と名づけるのである。もし現存在がその本質の根源において超越しないならば、即ちこの場合には、もし現存在が前以って無の中に保たれていないならば、それは決して存在事物に関係することもできず、また自己自身にも関係できないであろう。¹⁸

指摘するまでもなく、「現存在が前以って無の中に保たれていないならば」、存在事物すなわち存在するものに関係することができない、というこの事実、これをいかにまたどの程度解し得たか、就任講演の成否は一にこの点にかかっていたといって過言ではないであろう。

「無の根源的顕示性なしに自己存在もなく自由もない」¹⁹と、引き続いて述べ、以上によって無に対する答えは得られたのである、と結論している。と言って講演はこれをもって終了したのではなく、無について、さらにその性格を記し、その上なお、無について自問自答し疑義の解明を言語化する努力を続け論述している。その一々の過程は興味深いものがあるが、無の性格の一部を記し、再び「無の座席」に言及し、書簡の最終問題に移ることとする。

無は対象でもなく存在事物でも全然ない。無はそれ自らだけでは現れず、またいわば無が附着しているように存在事物のかたわらに現れもしない。無は、人間的現存在にとって、存在事物がそのものとして現れることを可能にするのである。無が、初めて存在事物への対立概念をもたらすのではなく、むしろ根源的に存在事物の本質そのものに属しているのである。存在事物の存在の中で無の無化 (das Nichten des Nichts) が

生ずるのである。²⁰

仔細に検討すれば問題なしとしない。無は、人間的現存在にとって、存在事物がそのものとして現れることを可能にする、と言うが、すべてを迂りさせる不安との関わりはどうか。すべてを無にしてそこに再び存在するものが現れてくると言うのか。おそらくそうであろう。「不安の無の明るい夜においてはじめて存在事物そのものとしての根源的明闊さ（Offenheit）が生まれる。即ちそれは存在事物である」²¹、と言う、よく知られた言葉のうちにも表れている。

根源的不安はただ稀な瞬間にのみ起こるとハイデガーがいう²²のは、存在事物に対して自己を失うからである。我々は忙しい生活において存在事物を気にかけることが多ければ多いほど、我々は存在事物を迂りさせることがますます少なく、ますます無から離れる。しかしそのことによって我々は現存在の明らか表面に押し進むのである、とハイデガーは説いている²³。

なお、「隠された不安の根拠によって現存在が無の中に保たれていることが、人間を無の場所の占有者たらしめている」²⁴、という、この表現が「無の座席」、そこに人間が位置しているというのではなく、人間は「無の座席」である、と言うのであるから、そこに微妙な差異はあるものの、最も近似した表現を『形而上学とは何か』の本文のうちに見出すことができる²⁵。

2.4 無と「立つ場をとらせる力」

無は『形而上学とは何か』の本文にのみ、主題としてもっぱら現れているのみで、後語においては、講義の批判に答える際に取り上げられる程度であり、序文においても最後のほうで、最も重要な意味をこめての上であるが、わずかに現れるに過ぎない。

また、書簡によると、「存在の牧人」これは「ヒューマニズム」（1937年）に記されている人間についての呼称であるが、「無の座席」と同じように、現代機械文明に立ち向かうには不十分な言いまわしであると記されている。

書簡とともに『形而上学とは何か』を顧みつつ作

業を続けてきたが、ハイデガーの機械文明批判の基礎をなす、いわゆる計算的思考については、『形而上学とは何か』の後語においても取り上げられており、ハイデガー独自の発想の下に位置づけられている。

ハイデガー独自の発想とは、二分法的な思考法で、計算的思考に対して、本来的思考について論じている。前者があくまで打算的であるのに対して、後者は一切それを考慮しない非打算的である。

犠牲は断るまでもなく非打算的である。また貧しさの徳というのもそれに属する。これらは強制によるのではなく自由の下に働いているのであり、そこに恣意的ではない必然（Not）がある²⁶。

本質的な思考が、存在するものの他であると言う意味において²⁷、無と深くかかわるものであることは、粗略な叙述ではあったが推察可能であると思う。

さらに書簡の一部を引用して、ハイデガーの見解を記し拙稿を閉じることとしたい。

「立つ場をとらせる働き」すなわち世界を技術化する働き、これの正体を見極め、コントロールすることの可能性の探求、言ってみれば、これが今回取り上げた書簡の眼目であると言って誤りではないと思う。したがって、先にも記したように、「立つ場をとらせる働き」の本来的な意味の注視が、ハイデガーによって求められたのである。この注視によって、人間の本領にいたる道が教えられると言うのである。

この点について触れることなく、『形而上学とは何か』における無の考察に向かったが、それは問題の焦点を外したのではなく、書簡においてハイデガーが先ずこの書を取り上げたこと、たとえそれが、日本の学者あるいは一般市民を対象にして記そうと意図した、そのきっかけに過ぎないにしても、言うに足る大きな問題であるが、その点にこだわることによって、ハイデガーの思想、特に「無」についてかなり深く顧みる機会とした。言ってみれば、ハイデガーの生涯において特別の意味を持つ『形而上学とは何か』と日本あるいは日本の学徒さらに思想との関わりに触れてくる問題でもある。しかし、今回は、『形而上学とは何か』の主題である「無」、その持つ意味、それが、提起されている「立つ場をとらせる働き」の問題の考究に資せしめようとしたからに他ならない。

いま改めて、ハイデガー自身のこの難問に対する見解を聞くことにする。

3. 人間の本領に達する道

ハイデガーが日本の研究者の質問に答えて、それを三点に要約した第三の項目③「人間たる本領に達する道」はどこにあるのか。これにかかわるのが「立つ場をとらせる働き」に関するものである。これについてはしばしば触れてきたが、ハイデガー自身の声に直接するところが希薄である。この点を顧みて、以下記すこととする。と言ってこれまでの叙述から見て事新しいと言うものではない。表現上のニュアンスはあっても根本において変わりはない。

3.1 人間の本領

人間の本領というのは、「人間が存在によって、存在にむかって、要請されている応力の意味において自己の人間性を表すもの」であるとハイデガーは書簡において記している²⁸。応力という言葉はあるが、問題は存在にある。これをつかまないことにはハイデガーの説くところにはついて行けない。「無」の考察はそのためになされたと言って過言ではない

人間とは、立つ場をとらせる力によって、この力のために、役立たされるものなのです。²⁹

立つ場をとらせる力あるいは働きに役立たされる、とはどういうことか。ここで計算的思考を想起すればおおよその見当はつくであろう。つまり非本来的思考による人間がここでの人間である。それは言うてみれば、日常的なわれわれと言ってよい。立つ場をとらせる働きのなすがままに、つまり無自覚に生活している。立つ場をとる力をコントロールするどころの話ではない。したがってこれに続くハイデガーの言葉もよく理解される。

人間の特性は、人間が自分自身に属していないということに基づいています。私たちが、この技術化された世界のなかで何が支配しているかをさしめしてくれるような洞察にしたがうなら、必ずやそこに決定的な悟りに出会いうるで

しょう。³⁰

ハイデガーの小島威彦に対する返書の答えはこれに尽きている。あと二三引用するが、説明の敷衍にすぎない。

立つ場をとらせる力は、十分に思索するなら、もし人間があらゆる問いのなかでもっとも問うに値する問いの中に辛抱強く逗留する覚悟を持つるならば、人間は自己の使命の本領に到達できるものだという約束を、それ自身のうちに蔵しているものです。³¹

人間本領到達の道、それがここに示されている。

あらゆる問いのなかでもっとも問うに値する問い、『形而上学とは何か』の後語において見た、思考の本質にかかわる問い、つまり存在するものではなく存在についての問いであることは明白であろう。

存在について反省を促す次の叙述もこれと異ならない。存在忘却とあからさまに言わないにしても。

この問いこそ、西欧的・ヨーロッパ的思考が従来「存在」という名称の下に措定せねばならなかったものの本来の特質が、どこに潜んでいるかを省察するものなのです。³²

ここで断っておきたいことは、いわゆる二分法の単純な適用をハイデガーが主張しているのではないことで、立つ場をとらせる力の評価に連なる。それは人間に対する評価でもある。

思考が帰還の歩みをたどることによって、繰り返される迷誤を避けることに成功するにしても、つまり、人間が技術の主人となって奴隷になるのではないにしても、主人と奴隷の二者択一ではなく、つまり、人間が原始エネルギーの管理に成功したにしても、人間が技術の主人になったとは、いわれないように、その管理の不可欠なことが、立つ場をとらせる力の承認であり、同時に人間の無能力の暴露であるとハイデガーは指摘し、さらに覆い隠されている立つ場をとらせる力の秘密に、反省しつつ応じようとする合図も含んでしていると示唆する³³。ただし、こ

の反省は従来のヨーロッパ的哲学では遂行されないと宣告するが、また、それなしには不可能であるともいう。これをもっていかにすべきか。ハイデガーは次のように記して書簡全体を結んでいる。

数世紀ならずして展開された、しかし二千年を通じて準備されたこの世界の近代化は、一朝一夕にしては、あるいは単に人間の企てだけによっては、人間の本領のなかへ救出された人間性がそこに逗留する住家を、見いだしうほどの光に照らされるものではありません。³⁴

ここにもハイデガー独自の史観と人間観（逗留する住居の強調）を見る。さらに、「単に人間の企てだけによっては……見いだしうほどの光に照らされるものではありません」という、この一節に論及する暇はないが重要である。

すでに指摘したように、人間本領到達の道は、立つ場をとらせる働き、すなわち世界を技術化する働きについて、省察する辛抱強い忍耐を要する思考を決断し、長くそこに逗留するならば、「立つ場をとらせる働き」に対応する道がひらかれる。すなわち、人間の本領に達する道が見えてくる。

4. むすび.

ハイデガーにおける無について、日本人に宛てた書簡（返信）を参考にして考え直してみた。ハイデガーの技術批評に偏り過ぎた嫌いなしとしないが、むしろそこに生かされている思想が『形而上学とは何か』のなかに脈打っている「無」の思想と深くかわるもののある点を察知していただければ拙稿の目的は達せられたといつてよい。

¹ 『読売新聞』1963年9月22日、(記載の数字は漢数字)。(転載の『ハイデガー—生誕120年、危機の時代の思索者—』河出書房新社、2009、164ページ)。

² 湯浅誠之助はハイデガーの就任講演を聴講。これに感激し早速、翻訳し出版した。湯浅の求めに応じてハイデガーは序文を寄せている。

³ 同上、河出書房新社、159ページ

⁴ 同上。

⁵ 西田幾多郎『哲学概論』「付録三 形而上学はいかに

して可能か」、岩波書店、1964、209-13 ページ参照。実在の考え方による点参考になろう。なお、このような見方とは異なる立場として、峯秀樹『存在と無のはざまにて』、ミネルヴァ書房、1991、301 ページ、注釈(7)参照。

⁶ 同上、河出書房新社、161 ページ

⁷ 同上、162 ページ

⁸ 同上。

⁹ 同上、164 ページ。

¹⁰ 同上。

¹¹ 同上。

¹² 同上。

¹³ Vgl. M. Heidegger, *Was ist Metaphysik?* Neunte Auf., Vittorio Klostermann Frankfurt a. M. 1965, S.39. (WMと以後略記)

ハイデッガー『形而上学とは何か』大江清志郎訳、理想社、1965、62 ページ参照。

¹⁴ ハイデガーの研究者によって著しく異なった見方をしている。鬼頭英一は、存在を行為と解している。一つの極端の例、と、言うのは、断るまでもなく、ハイデガーの存在は存在論において論じられているのであるが、行為は実践哲学における主題と言ってよく、存在論とは自ら性格を異にすると見なされる。もっとも鬼頭が苦闘の末に到達したハイデガー読解である点、尊重すべき見解である。

(鬼頭英一『存在論』、朝倉書店、1923 参照)。「存在とは何かといふ問に答へる為には、何をしたらよいかいふ課題の意味を明らかにしなければならない。何となれば、存在は、我々がかかる課題の前に立つ時、その具体的な姿を現はすからである」(同上、7 ページ)。

¹⁵ M.Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Halle a.d.S.1935,S.38,S.436.

¹⁶ 前出、河出書房新社、164 ページ。

¹⁷ WM.,S.35.

前出、大江訳、53 ページ。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 同上、54 ページ。

²⁰ 同上。

²¹ 同上、52 ページ。

²² 同上、55 ページ参照。

²³ 同上参照。

²⁴ 同上、59 ページ。

²⁵ 書簡にある、「人間が存在の呼びかけに応じ」と言う記述は本文である講義には見当たらない(1929年と記載しているがこれは講義のみを表している)。後語(1943年)にはこの種の表現あるいは発想を目にする。つまり存在を擬人化ないしは人格化するのは後語においてであり、また後語にはその点がひととき目立っている。ハイデガーの後期の思想の特徴であろう。

²⁶ この間の事情を伝える文を記載しておく。

Das Denken, dessen Gedanken nicht nur nicht rechnen, sondern überhaupt aus dem Anderen des Seienden bestimmt sind, heie das wesentliche Denken. (WM.,S.49)

思考が、計算的ではなく、本質的思考であることの紹介であり、存在するものにとって、本質的思考は他なるものであることが示されている。存在するものにとって他なるものである、とは、無であり、存在であることを想起しておきたい。

このあたりの記述は『形而上学とは何か』を理解するにあたりきわめて重要である。以下しばらく引用を続ける。

Statt mit dem Seienden auf das Seiende zu rechnen, verschwendet es sich im Sein fr die Wahrheit des Seins. (ibid.)

本質的思考について述べられている。(計算的思考が)存在するもの(存在事物)について存在するもので計算するのに対し、本質的思考は存在の真理のために存在のうちに自らを消耗する。

存在の真理に注目を促している。

Dieses Denken antwortet dem Anspruch des Seins, indem der Mensch sein geschichtliches Wesen dem Einfachen der einzigen Notwendigkeit berantwortet, die nicht ntigt, indem sie zwingt, sondern die Not schafft, die sich in der Freiheit des Opfers erfllt. (ibid.)

この長い一節は、本質的思考が存在の呼びかけにこたえることから始まっている。ここで書簡の「無の座席」について、「存在の呼びかけに応ずる」とあったことと、あわせ考えると、1929年の講義ではなく、後語(1943)との関わりで述べられていると言う想定根拠が示されているものと思う。この点の指摘も、「無の座席」あるいは「存在の牧人」では不十分としているが、いずれにしても、『形而上学とは何か』における、現代機械文明批判についての位置づけとして、後語の持つ重要性を顧みておきたい。なお、「存在の牧人」の発想についても、後語に見えるところより、あえて「ヒューマニズムについて」を持ち出すまでもないようにも思うが、1937年に公刊されている点を考慮すれば、それなりの意味はあると言わなければならない。

必然と犠牲について、次に引用し参考に供しておく。

Die Not ist, da die Wahrheit des Seins gewahrt wird, was immer auch dem Menschen und allem Seienden zufallen mge. Das Opfer ist die allem Zwang

enthobene, weil aus dem Abgrund der Freiheit erstehende Verschwendung des Menschenwesens in die Wahrung der Wahrheit des Seins fr das Seiende. (ibid.)

なお、「存在の牧人」の思想は、「存在の番人」(die Wchterschaft des Seins)として、『形而上学とは何か』の後語において記されている(WM., S. 49)。

本質的思考が犠牲に関わり、さらに感謝論へと展開する、そこに一層のハイデガーの思索の興味ある深化を見るが、これについては別稿に譲る。

²⁷ 本質的思考は存在にのみ関わり、存在するものにのみ、もっぱら計算的思考を働かせてかかわっている思考、この思考から見ると、本質的思考は他である。存在と存在するものの差異、峻別を思うべきである。

²⁸ 前出、河出書房新社、164 ページ

²⁹ 同上。

³⁰ 同上。

³¹ 同上。

³² 同上。

³³ 同上、164-5 ページ参照。

³⁴ 同上、165 ページ。

(Received: September 30, 2009)

(Issued in internet Edition: November 1, 2009)